

## 今の流れでいいのか？ 英語教育

### 今後のひとつの方向性を探る

加藤 栄一

#### 1. はじめに

ほとんどの生徒が大学進学を旨とし、ほぼ半数が国立大学に進学するいわゆる進学校に勤務して9年になります。英語教師として最近の高校生の英語力について以下の点を感じるようになりました。

- ①外国人に対して物おじしない
- ②英文を感覚でとらえていく、英文の形や構造はあまり意識しない
- ③英語の正確な読み・書きという点では力は落ちている
- ④学力差の拡大、特に簡単な単語のスペルが書けない。Be動詞と一般動詞の区別もつかない生徒がいる
- ⑤センター試験のようなものは無難にこなすが国立大学の2次試験は苦手

#### 2. 現在の英語教育の問題点

日本人は何年間も英語を学習しているのに、ほとんど話せない、という批判のもと「以前の文法訳読の学習ではだめである。オーラル面をもっと取り入れなければならない。」ということで高校生の英語の授業から文法が消え、ALT(外国語教員指導助手)が現場に導入され、またオーラルコミュニケーションが1つの科目となりました。ペアワーク、発表など、確かに今までより英語を話し、聞く機会は授業という限定された時間のなかでは増えたように思えます。ただオーラルが導入されてもう何年もたちましたが当初目指した読み・書き・聞き・話すといった4技能のバランスよい学力となって、生徒たちの身につけているかは、はなはだ疑問です。

言語が音声として存在し、文字を欠いてもその統一性を保ち存続し得るものであることは認めますが日本人にとって英語はSecond languageではなく、Foreign languageである現状をしっかりと認識すべ

きだと思えます。英語が絶えず飛び交っている中に身を置いている場合と、英語が外国語であって努力して機会を作らなければ、普段英語の音声に接し得ない場合とは事情は異なります。現在音声と会話の重視が叫ばれるなかで正確な読解力・作文力が低下している実態にきちんと目を向ける必要があります。

母国語はその言語を貫く法則性を意識しなくても音声は意味に転化されます。ただ外国語の場合その言語の規則・法則性をしっかり教えたり、英文の構造を意識的に学習させる必要があるのではないのでしょうか。外国語の構造上の特徴と日本語のそれとの違いを知ることによって、日本語への理解を深めることも外国語の学習の重要な目的だと考えられます。

#### 3. 今後の英語教育の方向性

現在の高校生は、英語以外にもさまざまな教科を学習する必要があります。英語にかかる学習時間にも一定の限界があり、そのなかで効率よく英語を教える必要があります。オーラル・コミュニケーションの重視が叫ばれるなか、本来は個人的な反復練習や人と関わる経験が必要な会話を授業の中心に置き単なる限定的な場面等の練習に終始するよりもむしろしっかりした読解力を養成することが必要だと考えます。もちろん外国語習得にあたってはオーラル面での練習ももちろん必要ですがそのタイミングがあるのではないのでしょうか。学習しようとする言語の必要性その目的・学習可能な時間・本人の集中力等も考慮されるべきです。現在、日本の高校生が置かれている状況を考えた場合、やはりオーラル重視よりもしっかりした読解力をつけることを教える基本として考えるべきではないのでしょうか。

#### 4. ひとつの試み

正確に英文を読む力をつけるには、何をどのように教えればいいのか、どのような力がつけば英文を正確に読めるのか考えてみたいと思います。

どんな英文を読むにしてもその読解を可能にしている形態上の約束事をマスターする必要があります。英文を読んでいて意味がわからない場合、形態から分析によって正しい理解に近づくことは可能だし、英語はその種の法則性を含んだ言語です。言語には音声と意味との間に、社会的に認知された関係が存在し、母国語はその認知されたものを意識する必要はありませんが外国語の場合、まずその認知関係を意識する必要があると思います。

英語においては以下の観点が必要だと考えます。

- ①主語と述語動詞の結びつき
- ②目的語と補語の働きと関係
- ③節などの固まりのとりえ方
- ④修飾—被修飾などの語と語の関係

生徒に意図的に主語と動詞の離れた英文を提示することで主語と動詞の結びつきを意識させる。また意図的に節の構造が複雑な英文を提示し、節をとらえることの大切さ意識させる。などの工夫をして以下の柱立てをしました。

#### I. 主語—動詞の結びつき

- (1) S (M) V
- (2) S = 準動詞

#### II. 目的語・補語に注目

- (1) O と C のネクサス
- (2) S—V—O ~ C

#### III. 倒置の基本パターン

#### IV. 名詞節

- (1) that 節
- (2) 疑問詞節

#### V. 関係詞節

- (1) 関係詞の節の内部での働きを意識
- (2) 先行詞との関係
- (3) 前置詞+関係代名詞
- (4) 関係詞節を正確にとらえる

#### VI. 比較

- (1) 比較構文の基本的成り立ち
- (2) その応用

#### VII. 分詞構文

- (1) 基本的成り立ち
- (2) 独立分詞構文

#### VIII. 目的語と補語以外のネクサス関係

#### IX. 相関構文

次に柱にそった英文を入試問題から集め、テキストを作り教材としました。

#### 5. 生徒の反応

あとで生徒にアンケートをとり、授業のすすめ方と教材の是非についての意見・感想を集約しました。

生徒は当初、文法訳読方式でもなく、英文の構造を意識させる授業のすすめ方にとまどった生徒もいたようですが初めて読む英文で、何をベースに考えて読んでいけばいいのかわかった、複雑な英文もそれほど抵抗感がなくなったという意見が多く見られました。

#### 6. まとめ

読解力をつけるにしても、もちろん多読も必要です。ただし学習指導要領にあるように概略をとらえるといっても、ベースには正確に読めることがあつてのことだと思います。また多読によって読解力をつけるにしても、どれくらいの英文を読む練習を重ねれば例えば大学入試の英文が読めるようになるのか、生徒にとっては不安が残るのではないのでしょうか。こういう考えで読めば、未知の英文も読めるというものを生徒に提示してやる必要もあるのではないのでしょうか。

(富山県立富山東高等学校教諭)